

あだち まさみ
安達 正美

飛躍の年・癸卯（みずのと・う）

●日本郵政グループ労働組合
（JP労組）・書記長

2023年明けましておめでとうございます。
今年が癸卯（みずのと）という年になる
そうです。十干の10番目にあたる癸と、十二支の4番目にあたる卯の組み合わせで、
終わりと新たな始まりを表す意味があるとのこと。

一周前の2011年は言わずと知れた東日本
大震災で、人的被害は言うまでもなく原発事
故の恐ろしさを離れた東京でも感じたもので、
原発エネルギーの見直しもこれを機に議論さ
れ始めました。

2023年には「空飛ぶクルマ」の販売開始
の構想が進められるなど、未来のエネルギー
でウサギらしく飛ぶようなシステムが近い将
来実現するかもしれません。

ちなみに卯という文字は卵をふたつに平等
に分けたような、同じ形のものを左右対称に
置いた様子から、価値が等しいものを交換す
る、という意味もあり貿易の質に使われたと
されています。また、景気が上向きに跳ねる、
回復すると言われており、株式市場にとって
は縁起の良い年として知られています。

さて、年明けして一年の始まりを迎えて二
ヶ月もすると年度末がやってきます。一般の
会社では決算期を迎え、人事異動が行われる
時期となります。

日本郵政グループでは昨年度から65歳ま
で定年延長が始まり、満60歳を迎えている
社員は退職金を貰うか貰わないか、また退職
するか継続するかを選択の時期となります。

昨年イーロン・マスク氏が「日本はこのま
まではなくなる」と衝撃的な発言をしたこと
はまだ耳に新しいですが、一瞬「日本が無く
なる？」と思いきや、出生率の問題で日本人
が居なくなることが世界にとって大きな損失
になるだろうという警鐘を鳴らしているとの
こと。

出生率の減少は将来的な生産年齢人口や労
働人口の減少につながり、2045年に15歳未
満人口は全体の約11%、65歳以上人口は約
37%と言われており、生産力や労働力の弱
体化により、経済成長、消費や貯蓄などへの
影響が懸念されます。

出生率や女性就労に関する調査によれば、
「仕事と家庭の両立度が高いと出生率は増加
する」とか、「女性活躍が進んだ企業は業績
や株価への影響として増益率が高く株価を押し
上げている」との分析や論法もあるようで
すが、そもそも求められているのは経済が安
定し、未来に不安を感じなくなることじゃな
いかと。

年始のあいさつに重苦しい話ばかりでは躍
進もできなくなりそうなので、最近見たり聞
いたりした言葉に関する話をしようと思いま
す。

テレビの街頭インタビューで、商店で売ら
れている小さなトマトをなんと言うかと質問
し、若者はミニトマトと年齢があがるほどブ
チトマトと答える人が多くありました。結果
小さいトマトの総称をミニトマト、その中の



一つにプチトマトがあるといった話でした。これはどちらも現代に生きている言葉の使う頻度の問題ですが、三省堂国語辞典が8年ぶりに刷新となり、いわゆる死語となる言葉と新語の入れ替わりをしたとのこと。

例えば「スッチー」、「コギャル」、「MD」は辞書から消され、新語として「黙食」、「ゾーンに入る」、などがあげられていました。「ことば」はいわば、生き物。目まぐるしく変わる社会や価値観の変化とともに、刻々と新しいことばが生まれています。一方で、使われなくなり、時代とともに意味が変わっていくものも数多くあります。約60年前の国語辞典には「女」は「優しく、子どもを産み育てる人」と書かれていました。当時の典型的な女のあり方とされていたということでしょう。

三省堂国語辞典第八版（2022年）によれば、「人間のうち、子を産むための器官を持って生まれた人（の性別）。」「生まれたときの身体的特徴と関係なく、自分はこの性別だと感じている人も含むとし、「性自認」の観点からも、「女」ということばを見直しています。

2010年代に、ジェンダーについての意識が多くの方に育ってきた中で、性別は、持って生まれた体とは別に、心の面も考えるべきではないかという議論が多くなされるようになってきました。そうした動きを辞書に反映しないわけにはいかないということで、今回

の内容になっています。

気になったので、およそ60年前の「男」ということばも見てみました。

初版1960年では、「人のうちで、力が強く、主として外で働く人。」。第八版では、「男」…「人間のうち、子種を作るための器官を持って生まれた人（の性別）。男子。男性。」〔生まれたときの身体的特徴と関係なく、自分はこの性別だと感じている人も含む、としています。〕

女性の出産と家庭と仕事の両立の難しさ、それを家族で乗り越えカムバックがしやすい環境、女性躍進をうたう前から郵便局の窓口等、女性社員が多かった歴史から、そもそも産休育休などの制度の充実に向け組織を挙げて取り組んできましたが、時とともに移ろう時代の趨勢やパンデミックなどの環境変化になかなか合わない現状と向き合っていかなければなりません。

J P 労組では「J P 労組ジェンダー平等推進計画」を実行しながら、組合員が「誰一人取り残されない」、多様性と包摂性に満ちた組織づくりを目指し、組合員ひとり一人が意識をもって取り組みを進められるよう、リーフレットを作成し理解を深めようとしています。

以上、癸卯に努力が実を結び、勢いよく成長し飛躍する年になることを願う、卯年生まれレポートでした。